

春の夜の朧雲なる回想のみなもとにある深川飯屋

中西由起子

「深川飯屋」のレトロなイメージが一首の持ち味。「春の夜の朧雲なる」という古風で文字通り輪郭のないもやもやした形容を受けて、結句でかつちりとした具体的なイメージをもってきて成功。

時間割つくる男の目が動き時間を積んだり下ろしたりす  
小川真理子

学校の時間割を作っている男性らしい。月曜日の二限目の数学を水曜日の三限目に移そう。そんな作業に取材しているようだ。時間という人間が作り出した観念をあつかう男性を、あたかも煉瓦を積みあげているように比喻した手腕。

前を行く五人の僧侶縦と横高さで時間残る真実

浅野稔

一読して、僧侶は横並びかと思つたが、そうではないらしい。縦にも横にも広がって歩いているらしい。「時間」は縦並びの複数が過ぎてゆく時間だろう。

なお、「四人の僧侶 庭園をそぞろ歩き……」とある吉岡実さんの有名な詩「僧侶」を思い出す。が、関係がないらしい。知らないですまされない有名な詩なので残念な気もするが。

産み月の四月まことにあかるくて幾たびも幾たびも  
深呼吸する  
佐藤モニカ

いよいよ出産間近になって、期待と希望におぼれそうな時期の準母親の一首。下句のくり返しに、間合いをとつ

## 短歌の現在

No.423

## 今月の15首を読む

## 佐佐木幸綱

て、助走前の心の準備をととのえる走り高跳びの選手のような呼吸が読める。四月に予定通り、男子誕生との連絡をもらった。おめでどう。

「踊り字」というを知りたりひよつとこの踊るへ美々津のまん中の文字  
小寺豊子

「ひよつとこの踊る」が「美々津」の序詞になっている。美々津は日向市美々津町。過日、宮崎で「ほろ酔い学会」を開催した折、ひよつとこが何人も登場し、宴席の間を踊りながら練りあるいていた。ネットで見ると、日向ひよつとこ夏祭りという祭りがあるらしい。じつさいを踏まえた序詞ということになる。踊り字とひよつとこ踊りの連想をうまく一首にまとめた遊び心。

駆け上がる水蒸気見ゆ曇天が傘となるなり化学工場  
桑野智章

遠景に水蒸気を空高く吹き上げている工場が見える。そんな風景を、動的に、ややユーモラスに描写。楽しい風景詠に仕上げている。

かくれんぼする子のやうにヒバリ鳴く雲一つなき空  
服部心子

鳴き声は聞こえるけれども見えない雲雀。「かくれんぼ」を出して、童心の歌にしあげた工夫。

地のものは地酒とともに味わわむ閑上浜のほっきの  
さしみ  
和田敏典

名取市閑上浜は、津波のニュースで何度も登場した地名。この一首、震災の歌の後に置かれていて、最近になって、やっとかつての日常を取り戻しつつある閑上の今を